学童疎開

生かされた命」の決意

本紙客員編集委員　藤原　健

沖縄セントラル病院理事長で脳神経外科医の大仲良一さん(81)は毎年、8月になると自らが「生かされた命」であったことの意味を思い起こす。

72年前の1944年8月14日、兼城国民学校3年生だった大仲さんを乗せた学童集団疎開船は那覇港を出発、熊本に疎開した。その1週間後の21日、集団疎開の学童を含む1788人を乗せた陸軍徴用貨物船「対馬丸」が那覇港を出港。長崎に向かう途中の22日夜、トカラ列島の悪石島から北西約11キロの海上で米潜水艦「ボーフィン」の魚雷攻撃を受け、沈没した。乗船者の内1418人(氏名判明分)が犠牲になり、うち学童は775人に上った。「私が『対馬丸』に乗っていたら…。私は生かされた命なのです」

44年7月、「絶対防衛圏」とされたサイパンが陥落、この事態を受けて南西諸島の老幼婦女子を九州と台湾に疎開させることが決まり、その月に一般疎開開始、8月には疎開学童を乗せた船舶が那覇港から九州に向かった。沖縄戦が始まる直前の45年3月までの9カ月間に九州に疎開した沖縄県民は約7万人。うち、学童疎開は宮崎県に3158人、熊本県に2612人、大分県に341人の計6111人。大仲さんはその1人として、戦争を生きた。沖縄本島に残った親戚のうち、沖縄師範学校を卒業したばかりの叔父と従軍看護婦だった叔母は戦火の中で亡くなっていた。

6年生の時、すべてが灰燼(かいじん)に帰していた故郷・沖縄に帰った。高校卒業後、父と同じ獣医を目指して東京の大学に入学。ある日、アフリカで住民のための医療活動に生涯をささげたシュバイツァーの著作を読んだ。これがきっかけで、大仲さんは獣医ではなく医師へと歩みを変える。

そして、シュバイツァーのもとで活動した経験のある日本人医師の話を聞く機会があったことが、大仲さんのその後の医師としての生き方を決定づけた。医療活動の原点は、「治療即奉仕」―。沖縄戦で「生かされた命」は、医学生の時代から西表島での医療ボランティア、慶良間諸島でのフィラリア調査に動く。医師になってからも与論島での離島医療活動も経験する。

大仲さんの舞台が広がったのは88年、国連の専門機関であるWHO(世界保健機関)の特命を受けてインドで1カ月、ポリオの実態を調査してから。これを機に、インドを含むアジアを中心に32カ国に支部を置き、国際的な医療援助活動を展開している国連認定NPOのAMDA(アムダ、旧称・アジア医師連絡協議会、本部・岡山市)の創設者、菅波茂さん(69)と出会い、大仲さんが沖縄支部の代表を引き受けることで、沖縄からの移民が多い中南米にもAMDAの医療活動が広がっていく。

沖縄セントラル病院には、ペルーに移民した沖縄出身の両親を持ちペルーで生まれた内科医、渡久地宏文さん(68)が在籍する。スペイン語とポルトガル語に堪能な渡久地さんをスタッフにしたAMDAの中南米でのこれまでの活動国は、地震など自然災害での緊急支援として、ハイチ、グアテマラ、ニカラグア。ペルーでは一昨年まで3年間、継続的にエイズウイルス(HIV)撲滅に向けた保健教育支援を続けた。

AMDAは、「救える命があれば、どこへでも飛んでいく」のがモットーだ。こうした活動に対し、沖縄県は2004年、「沖縄平和賞」に選んだ。「平和共存の社会を実現するには、民族や宗教の違いを越え、相互理解に努める」ことを医療面で実践してきたことを評価したからだった。大仲さんの若き日の医学への志もこの評価に重なっている。

地球規模の視野を持ち合わせる大仲さんだが、那覇市から委嘱を受けた「協働大使」として地域に密着した医療への目配りもおろそかにしていない。例えば、南海トラフ級の地震が沖縄近海で起きることを想定しての体制づくり。

「普段から、地域の医療関係者はもちろん、家屋の復旧に力を発揮してもらう大工さんなど、復旧・復興に関連するあらゆる技術を持った人たちを地域ごとにリストアップする。そして、『いざ』というときにすぐに活動できるシステムを事前につくっておく。また、看護師、保健師さんたちの海外、県外の救援活動や救援への意欲を、その属する病院や行政のトップにもっと理解をしてもらうよう、普段から働き掛ける。そんな地道な活動も必要ではないか」

救援に加えて、自然災害など不測の事態にも備える。それが「対馬丸」で犠牲になった同年代の人たちへの責任であり、「生かされた命」の義務でもあることを大仲さんは強く思う。

(元毎日新聞大阪本社編集局長)